

特集 「アメリカと中国の民俗学のフロンティア」

特集にあたって——日本の民俗学を世界から孤立させないために

菅 豊

近代的状況において、世界のさまざまな国々や地域で「民俗学」という学問が勃興してきた。民俗学は、近代において、各国、各所で沸き起こった土着文化の自己理解とその復興運動——ときに反近代の抵抗運動——そして、その運動の学問化の動きといえることができる。

日本では、民俗学は二〇世紀初頭に柳田国男たちによって喚起され実践された草の根の運動であった。それは、ある時代の要請によって生成した「時代の産物」であり、当初は「野の学問」として出発し、一〇〇年近い時間の経過とともに体系化され、組織化され、そして制度化されてきた。その学問の「発展」の歴史は、その善し悪しはともかくアカデミズム化の進行の歴史といっても良い。しかし、アカデミズム化の過程で他の学問が必ずといって良いほど体験してきた、海外の学問との学術的交流に関し、日本の民俗学は消極的であったといわざるを得ない。

日本で「野の学問」として生まれ出た民俗学は、制度化された知の世界にアカデミーで萌芽したものではなく、それとは離れたところにいた人びとが芽吹かせた「学問」であった。人文・社会科学のアカデミーも、いまほど整理されていなかった時代、日本において多くの人びとが、未だ歴史や文学、芸術などの入り交じった非定型の知の営みを通じて、自己の周りの身近な問題を考え、表現し、発信するという、草の根の知を沸き立たせていた。そしてそれは、いくつもの小さな文化運動＝民間学（鹿野 一九八三）となって立ち現れた。そのなかのひとつに、いまの民俗学の

プロト・タイプがあった。それは国産の学問であり、その時点では海外の民俗学との交渉は困難であった。

その後、草の根の知を紡ぐ営為のなかには、考古学のように海外から移入された制度的知の営為の体系に取り込まれるものもあったが、日本の民俗学にかんしては、幸か不幸か取り込まれる外来の知の営為も訪れず、孤高を保つことができた。いや、正しくは拒んできたと表現すべきであろうか。欧米の制度的な知の営為が移植され、官学アカデミズムが主流となつたいまの日本の学問の根本に、欧米の知との連続性を第一とする、あるいは地域を越えた知の普遍性を第一とする偏った価値観が存在することは間違いない。また、そのような海外との連続性が欠如する学問を、低いもの、遅れたものとみなす風潮も未だある。そのような価値観と風潮には、民俗学は大いに反駁すべきである。しかし、その反駁が、世界の民俗学を理解することなしになされた場合、単なる「負け犬の遠吠え」になってしまうことは火を見るより明らかである。

日本の民俗学はそのような価値観や風潮に過剰に劣等感をもち、それと表裏一体の過剰な敵愾心にて海外の理論や研究内容の参照を拒み続け、あるいは「日本独自の」という俗耳に入りやすい自閉的ナショナリズムで国際化できない状況の自己弁明と自己肯定を繰り返すことによつて、アカデミズムのなかでの立場を悪くしてきた。そうはいうものの、アカデミズムのなかで普通のテイナプリンとして定立するにあたって、普通のこととして要求される能力や要件を満たさないにもかかわらず、民俗学は、どうかかこうにかその片隅に僅かながらも居場所を占めてしまつたのである。しかし、その居場所も、いまはかなり危うくなつてきていることに、日本のアカデミック民俗学研究者の大方は、まだ気がついていない。

そのような海外へと繋がる回路を遮断した元凶は、一見すると日本の民俗学の創始者である柳田国男に求められるかもしれない。彼は、弟子たちに対し外国の著作を読むことや、理論を学ぶことを禁じたという俗説も言い伝えられるほどである。それは誇張された俗説かもしれないが、しかし柳田は、日本の民俗学を形作るなかで、確かに海外の知見に対し表面的には冷淡な反応を示していたようである。

「……たゞ私などのいやでたまらぬのは受売と翻譯、ちがつた國語でもう外国人の云つてしまつたことを、そつくり持つて来てへい是が學問と、云はうとする者の頭を出すことである」〔柳田 一九六三〔一九四六〕：二七七〕

この柳田の言葉は、海外の知見を受け入れることを拒んだというよりも、海外の知見の受け売り、あるいは直接的な導入を戒めたものである。みずから考え、みずから資料を集め、みずからの学問を構築しようと企図した柳田にとつては、それは当然の矜持であった。とはいうもの、柳田は民俗学のプロト・タイプを形作るなか、ジェームズ・フレイザーなどの海外の研究に大いに関心を示していたことはすでに知れ渡つている。たとえば、一九一三年二月五日付で、柳田が南方熊楠に宛てた書簡のなかに「フレイザーの三版第二（？）巻の中かに、米土人等蛙を二子と關係あるものごとく信すること見ゆ。このこと日本にも類型あるがごとくに候。何かのおついでに御蘊蓄を御発表下されたく、小生も少しく書き申したく候」〔飯倉 一九七六：三三三〕とあり、フレイザーの『金枝篇』に柳田は強く興味を覚えていた。この文章をしたためた前年の一九二二年に、柳田は『金枝篇』を継続しており、その頃はまたそのような「蘊蓄」を日本に紹介することにすら寛容であった。

しかし、それから下つて三十年後、『民間伝承論』（一九三四年）や『郷土生活の研究法』（一九三五年）を出版し、民俗学を徐々に足固めする時分にもなると、そのフレイザーへの関心は薄まるどころか、むしろそれへ否定的なまなざしを向けることになる。

「東北の蛙に助けられた話や、蛙と共に祀られて居る先祖の兄弟の話などを見るとよほど北米の土人の間に存するトテムの信仰と似て居る。フレイザー先生などのトテム考には、此程度の事実が有れば、トテム信仰の昔あつた痕跡だと認めて居られる。しかしそれは今後の興味ある研究問題といふのみで、今はまだ少しでも画定した事実でも何でもなし……斯んな外国の名前などには囚はれず、やはり日本では日本の事を明らかにしてかゝるが順序である。」〔柳田 一九六四〔一九三三〕：三二六―三二七〕

この辛辣な言葉は、日本民俗の源流を他民族に求め、「トテムイズム」などの外国製の学術用語、概念を積極的に取

り入れた中山太郎など、当初、柳田の周りに糾合せられたものの、さまざまな学風の特異性から柳田と離反していく、あるいは柳田から遠ざけられていった人びとに対し向けられたものと推察できるが〔菅 二〇〇〇〕、それは日本独自の学問宮為を結晶させようと思いついた柳田にとっては必然の振る舞いだったと思われる。この点については、佐伯有清によって、柳田の「国民民俗学の確立」、つまり日本民俗学の樹立の過程で、当初情熱をもつて吸収していたフレイザーの言説を、徐々に批判的に取り扱うようになる推移がすでに指摘されている〔佐伯 一九八八：一八六―二二五〕。

しかし、柳田が日本一国に凝集していくその三十年の間ですら、彼は海外の知見を吸収することを怠らなかつた。一九〇八年にイギリスにおいてジョージ・ローレンス・ゴムが『歴史科学としての民俗学 (Folklore as an Historical Science)』を上梓し、それが後に柳田へ強い影響を与えたことは夙に有名である〔モース 一九七六、甲元 一九九〇など〕。また、そのゴムが、“folklore”という言葉を造語した好古家のウィリアム・トムズらとともに、一八七八年にイギリスに設立した世界最初の民俗学会“(The) Folklore Society (イギリス民俗学会)”に、柳田は一九二二年に会員として入会している。その時期は、柳田が国際連盟委任統治委員としてスイスに赴き、ヨーロッパの民俗学に直接に接した時期と重なるのである。現在、成城大学民俗学研究所柳田文庫に所蔵される洋書約一五〇〇点を見渡しても、柳田が海外の知見を積極的に学んでいたことは明らかであろう。

柳田は、日本という国家領域を覆う地域研究としての民俗学の地歩を固める際、表面的にはその独自性、国産性を強調したものの、その実、海外の研究動向に対する入念な目配りを怠らなかつたと捉えるべきである。先に述べたような「日本独自の」という俗耳に入りやすい自閉的学問ナショナリズムに、日本の民俗学が陥穽されたのは、柳田の後裔から輩出した、日本のアカデミック民俗学研究者の怠慢と自覚のなさに起因するのである。

日本の民俗学は、世界に対して閉ざしてきた。もちろん、この自閉的なあり方は、何も日本の民俗学だけに限られたものではない。これまで、世界の民俗学に同様の自閉性が見られたのであり、それは民俗学が世界規模のアカデミズムのなかで権固としたディシプリンとして評定されない大きな理由となっている。さらに、民俗学がアカデミックな世界から撤退することを余儀なくされるといふ、危機的状況を各国で引き起こす理由となっている。

世界規模の民俗学史を編くならば、先に述べた (The) Folklore Society がイギリス・ロンドンで設立されたのを皮

切りに、世界各地で制度的な学問の創成運動が展開されたとき一般的には考えられよう。しかし、それぞれの民俗学には、学問の研究対象や方法で近似性はあつたものの、その細部を見るとかなり異質な部分をそれぞれが生み出してきた。世界的に統一された組織、団体、制度、理論、方法、目的はなく、それぞれの「国」で、それぞれに特徴的な「ミンソクガク」を形作ってきたのである。当然、日本ミンソクガク (Minzokugaku) # イギリスミンソクガク (Folklore) # ドイツミンソクガク (Volkskunde) # アメリカミンソクガク (American Folklore) # 中国ミンソクガク (Minsuxue) # 韓国ミンソクガク (Minsokhak) であり、それぞれは相同ではない。その点で、民俗学 (に類する学問) は普遍的なディシプリンを標榜する一方で、個別地域研究の性格を強く帯びてきたことは間違いない。

しかし、近年、多くの学問領域で研究活動の国際化が「あたりまえ」、あるいは「必須要件」となるなか、世界の民俗学もその状況と無縁ではいられなくなっている。たとえば、ヨーロッパ圏の民俗学は国家を越えた学問としての協力関係が進み、国単位の民俗学のみでは、もはや通用しない状況にある。また、アメリカ民俗学会も、近年、研究の国際化を積極的に進め始めており、欧米圏のみならず、アジアとの交流をも視野に収めている。アメリカ民俗学会では、学会内部に Eastern Asia Folklore Section を立ち上げ、研究大会で特別セッションを組み、研究者を招聘するなど、中国を中心としたアジアの民俗学との学術交流が積極的に行われている。

アジアの民俗学界に目を移すと、近年、中国民俗学界の海外交流は目覚ましいものがあり、民俗学のアカデミーにおける地位を向上させるために、学会レベルの国際会議が毎年のように開催されている。また、民俗学を専門とする多くの若手研究者が海外留学しているという利点を活かして、民俗学関連の学術誌には、ドイツやアメリカ、日本などの海外論考が活発に紹介され、その検討と吸収に努められている。この状況は韓国も類似する。

また、新しいところではアメリカ、ヨーロッパ、インド、オーストラリアなどの民俗学系の学会・団体が中心となつて、二〇〇八年より H-Folk (H-Folk: H-Net Network on Folklore, <http://www.h-net.org/~folk>) というインターネットを介した、学術交流が開始されている。スポンサーとなる民俗学団体は、アメリカ民俗学会 (American Folklore Society) を始めとして、イギリス民俗学会 (The Folklore Society)、カナダ民俗学会 (Folklore Studies Association of Canada/Association canadienne d'ethnologie et de folklore)、国際フォーク・ナラティブ学会

(International Society for Folk Narrative Research)、インド国立フォークロア支援センター (National Folklore Support Centre)、国際民族学・民俗学会 (Societe internationale d'ethnologie et de folklore/International Society for Ethnology and Folklore) など、インターネットを通じた活動情報の交換や、民俗学の多様な問題に関する議論が展開されているのである。

このように民俗学のグローバルな繋がりが深まりゆくことが趨勢となつたいま、井の中の蛙大海を知らずであつた日本民俗学会も、遅ればせながらその繋がりに加わろうとしている。日本民俗学会第二八期理事会では、アメリカ民俗学会、並びに中国民俗学会との間で国際交流協定を締結し、その関係を深めるシステム作りを進めてきた。また、日本における民俗学の研究成果を積極的に世界に発信し、また、世界各国の民俗学との国際交流・連携を促進させ、さらに将来の民俗学を担う研究者を育成するために、若手の日本民俗学会員を対象に、海外での学会における研究発表に要する費用の一部を助成する海外渡航助成事業もスタートさせた。そのような海外に開く雰囲気が、若干なりとも醸成された結果か、アメリカ民俗学会に入会する日本の若手民俗学研究者も近年散見されるようになり、二〇一一年のアメリカ民俗学会年次大会では、彼ら彼女らによって研究発表がなされるようになってきた―残念なことに、反対に海外の民俗学者の日本民俗学会への参画はほとんどないが…。そのような状況のもと、国境を跨ぐ民俗学の議論の共通アリーナの一部に、日本の民俗学が一定の領域を占める―消極的にいうならば「乗り遅れないようにする」「取り残されないようにする」―ためには、日本の民俗学の成果を積極的に発信し、他国の民俗学の成果を吸収し、民俗学の世界的状況をより深く理解することによつて、活発な学術交流を実現しなければならないのである。

本特集はそのような学術交流の手始めとして、先般、研究交流を日本民俗学会として公式に開始した、アメリカと中国の民俗学の良質の成果を吸収するために企画された。この企画は、今後、日本民俗学の研究成果を世界へと発信するための前段階の作業でもある。

もちろん、これまでも学会誌『日本民俗学』誌上において、両国の民俗学の「状況」は紹介されてきた。たとえば、近いところでは、第二七期理事会で企画された「海外の現代民俗学―東アジア編」(『日本民俗学』二五九号、二〇〇九年)、「海外の現代民俗学―欧米編」(『日本民俗学』二六三号、二〇一〇年)において、韓国、中国、台湾、ドイツ、

アメリカの民俗学が紹介されている。それらによつて、各国で行われている現代の民俗学の状況を、大枠理解することができるようになった。ただ、本企画は、上記のような企画と若干異なる観点から構成されている。

本特集は、その企画を編むなかで、以下の三つの観点を重視している。

第一に、本特集収載の論考は、すべてがそれぞれの国で活躍する民俗学者によつて書かれた論考であること。これまでの世界各国の民俗学の紹介は、日本の研究者の手によるものが多く、さらに、それぞれの国のネイティブ研究者の手によるものであつたとしても、それらはあくまで概括的な「紹介」が中心となつてきた。それらは、未だほとんど知られていない各国の民俗学の理解を深める上で、一定の貢献をしたものと評価される。しかし、本特集に収載されている論考は、そのような全体的な「紹介」を目的とした特別論考ではなく、そのほとんどが、それぞれの国の個別研究で生み出された具体的な「生身」の論考である。このような「生身」の個別研究では、それぞれの国の民俗学の全体像を知ることができないが、それぞれの国の民俗学の最前線の研究を知ることができるであろう。

第二に、本特集収載の論考は、すべてそれぞれの国の民俗学の先端的、先鋭的論文であること。それは、上記の「それぞれの国の民俗学の最前線を知ること」に呼応して設けられた観点である。いずれの国にも優れた論文があり、本号の小さな特集でそれらすべてを網羅することは不可能である。それは、研究のほんの極一部を取り上げたに過ぎない。しかし、アメリカ民俗学、中国民俗学の現地研究者へのサーヴェイをもとに、いま海外で民俗学を研究する彼女らが、自身の眼で「先端的」、「先鋭的」と位置づける論考を選択したのが今回の論考である。さらに、同時代的な研究成果を吸収するために、できうる限り新しい論考を選定するように心がけた。当然、もう少し古い過去にも優れた研究が山積しているが、現在、民俗学に関する議論の世界的な共通アリーナを作り上げるためには、研究史的懐古よりも「いま」に動いている民俗学研究が肝要だと判断した。

第三に、本特集収載の論考のほとんどが、それぞれの国の民俗学界へ影響力をもっていること。これもまた、現地の研究者の視角によつてなされる、「影響力」の大きさの評価に従うようにした。先端的であるだけでなく、それぞれの国の多くの民俗学者に認知され、学問的影響力をもつ研究者とその論考を学ぶことは、それぞれの国の民俗学の重要論点を知る上で大いに有意義であろう。

以上の「書き手がネイティブ研究者」、「先端的、先鋭的」、「学界への影響力」という特集の観点、そして収載する論文の選択基準によって選ばれた本特集の収載論者は、それぞれの国の民俗学の深くて尖った部分を、ほんの一部ではあるが体現している。それゆえ日本の民俗学において新しい研究領域を見出したり、また、みずからの研究にさらに新しい視角や方法を付加したりすることには、それらは寄与してくれる可能性がある。本特集は、柳田が危惧したような消極的な単なる「受売と翻訳」ではなく、未来の日本民俗学の発展「これはかなり困難ではあるが…」に向けた、積極的な知識と技法の拡大を目指すものである。願わくば、多くの読者に、みずからの研究を相対化する論点を、本特集の収載論文から発見していただきたい。そして、本特集が、明日の日本の民俗学を担う新世代の若手研究者たちの、海外民俗学への関心をさらに高めるための呼び水となれば幸いである。

〈引用・参考文献〉

- 飯倉照平 一九七六 『柳田国男南方熊楠往復書簡集』平凡社
 鹿野政直 一九八三 『近代日本の民間学』岩波書店
 甲元真之 一九九〇 『ゴムの方法論』国立歴史民俗博物館研究報告二七
 菅 豊 二〇〇〇 『修験がつくる民俗史―鮭をめぐる儀礼と信仰―』吉川弘文館

- 佐伯有清 一九八八 『柳田国男と古代史』吉川弘文館
 柳田国男 一九六三〔一九四六〕 『祭日考』『新国学談第一冊』（なお本稿は『定本柳田国男第十一巻』筑摩書房によった）
 柳田国男 一九六四〔一九三三〕 『忌と物忌の話』『土の香』五〇（なお本稿は『定本柳田国男第二十七巻』筑摩書房によった）

『日本民俗学』第二七三号 抜刷 二〇一三年二月

特集にあたって——日本の民俗学を世界から孤立させないために

菅

豊